

現代日本語の品詞兼務をめぐって*
——辞書調査を中心に

袁建華**

要旨：本稿は、単語レベルにおける品詞兼務と語基レベルにおける兼用という 2 つの視点から先行研究を検討し、品詞の二重カテゴリー化理論に基づいて「品詞兼務」という概念を再定義した上で、基本漢語 3000 語を対象に 3 種の国語辞書を用いてその品詞兼務の実態を調査・分析したものである。分析の結果、第一に、基本漢語において単一類と兼務類の比率がおおむね拮抗していること、第二に、二品詞兼務が最も支配的なタイプであること、第三に、主要な兼務パターンが〈名詞・動詞〉および〈名詞・形容動詞〉に集中していることが明らかとなった。さらに、英語や中国語といった分析的言語における品詞兼務現象との間にも、一定の共通性が確認された。これらの成果を踏まえ、本研究は、日本語の品詞的多義性が日本語の品詞体系の柔軟性および語彙拡張にいかにか寄与しているかを再考するための理論的基盤を提示するものである。

キーワード：現代日本語 複合字音語基 品詞兼務 品詞の二重カテゴリー化 辞書調査

1. はじめに

日本語の語彙は語種から見て複雑である。その中、借用語は固有の和語を超えおり、半数以上を占めている（野村，2013:7-9、沖森・肥爪，2017:4-5）。借用語における漢語は、日本語に取り入れられた歴史が長く、日本人の語彙生活に馴染んでおり、特に一字漢語はすでに借用語とは考えないほどである（岡井，1933:11）。一方、漢語は分析的言語の特徴である品詞兼務を部分的に本稿で取り上げた「基本漢語」とは、野村（1999）が「新聞調査」「雑誌調査」「中学校教科書調査」「高校教科書調査」といった 4 種類の語彙調査（いずれも国立国語研究所実施）をもとに抽出した 2 つの漢字からなる 3000 語である。基本漢語の中では、下記例（1）～（5）のような多品詞用法を持つものも少なくない。なお、本稿で使われる日本語用例は、特に断っておかない限り、いずれも「現代日本語書き言葉均衡コーパス」による。

(1) a. わたしたちは、もうこれ以上、この老女の心を傷つけるわけにもいかないので、丁重に失礼を詫び、根本宅を去ることにした。（高木彬光 1988『仮面よ、さらば』）

b. GDP の大きさを世界的に比較し、日本が欧米水準に追いついて豊かになったとか、どこそこの国は「最貧国」などと失礼なラベルを貼ったりする。

（川北英隆 2003『輝く株は発見できる』）

* 本稿は天津外国語大学 2023 年度本科教学质量与教学改革研究計画プロジェクト“《常用汉字表》在日语词汇教学中的应用研究”〔課題番号：TJWD23Q01；代表者：袁建華〕の段階的成果である。

**袁建華：天津外国語大学日語学院講師、日本語学院・高級翻訳学院修士指導教員、日本国立国語研究所共同研究員；研究分野は日本語学、中日対照言語学、コーパス翻訳学。

- c. 彼女のその様子に、牧は、これはどうにもならないなと判断し、「失礼しました」と、詫びた。
(深谷忠記 2003『白の風景』)
- d. ハムエッグとスープとライス、それにトマトジュースを注文すると、田宮は、斜めむかいのテーブルに座って、トーストにゆで卵、それに味噌汁という妙なとりあわせの食事をテレビを見ながら黙々と食べている、タクシー運転手の制服を着た男の横から、「失礼、いいですか？」ときいて、新聞をとり上げた。
(小松左京 1985『首都消失』)
- (2) a. そのとき、会社やその背後にある国家こそがりっぱに個人を保護し、同時に安心を提供することができるという宣伝が、第二のイエや第二のムラを通じてなされた。
(神島二郎 1991『政治をみる眼』)
- b. 障害をもつ人たちが働く喫茶コーナーだから、安心して「迷惑な客」になることができるのだそうです。このように喫茶コーナーという空間が、「癒し」の場、安心な「居場所」として、地域のなかでどのような役割を果たしているのか。
(打越雅祥 2001『学びあう「障害』』)
- (3) a. それは千晴の双子の姉という事実を知ってしまった上だからこそ起こり得るあくまでも好意的な混乱なのだ。
(浜本龍蔵 2003『火曜日に落ちる雨たちへ』)
- b. 事実、私としては、やるべきことは全部やったつもりだった。
(由良三郎 1989『二重殺人トライアングル』)
- (4) a. だが、大抵の場合、彼らは事前に危険を察知し、白軍の拠点などに逃げ込むのが普通であった。
(福本勝清 1992『中国革命への挽歌』)
- b. さらに、やっぱり怒りはいけない感情だ、危険な感情だ、というように怒りを敵に回してしまう第一歩にもなる。
(巖倉奈々 2000『「NO！」を言うことから始めよう』)
- (5) がんばらないということは、戦いの a.放棄にすぎないし、戦いを b.放棄しなくなかったらがんばりつづけるしかない。
(実著者不明 2004『ワルの知恵本』)

上記の例 (1) ~ (5) に示された「失礼」「安心」「事実」「危険」「放棄」は、いずれも同一の語形を取りながらも、文中における実際の使用 (パロール) では、それぞれ異なる用法を呈していることが明らかである。具体的に見ると、(1a) の「失礼 (を)」は名詞として機能し、「詫びる」の目的語に位置付けられる。(1b) の「失礼な」は形容動詞¹の連体形、(1c) の「失礼し」は動詞「失礼する」の連用形、(1d) の「失礼」は文頭に置かれ、感動詞として用いられている。同様に、(2a) の「安心 (を)」は名詞であり、「提供する」の目的語として使われる一方、(2b) の「安心し」は動詞「安心する」の連用形、(2c) の「安心な」は形容動詞の連体形である。また、(3a) の「事実 (を)」は名詞として「知る」の目的語に相当し、(3b) の「事実」は文頭に位置して副詞的に使用されている。(4a) の「危険 (を)」は名詞として「察知する」の目的語と

¹ 本稿の立場からは「形容詞」の下位類となるが、ここは辞書調査と一致させるために「形容動詞」という名称をそのまま使用することにした。

なり、(4b)の「危険な」は形容動詞の連体形である。さらに、(5a)の「放棄に」は「～すぎない」の補語として名詞用法を示し、(5b)の「放棄し」は動詞「放棄する」の連用形である。

本稿では、上記のような現象を「品詞兼務」(multiple class membership)と呼ぶ。松下(1978)は、名詞・動詞・副体詞・副詞・感動詞といった単性詞のうち、2つ以上の品詞的性質を併せ持つ語を「複性詞」と命名し、「複性詞は日本語(引用者注:主として「和語」を指す)にはないが漢文や歐洲語にはある」(p.190)と指摘している。一方、村木(2012:101)は、「漢語の部分を語幹(動詞と第一形容詞の場合は、合成語をつくる語基)とし、語尾や派生辞をともなつて、いくつかの品詞にわたる性質を品詞の兼務」と定義している。本稿は、上記の先行研究の知見を踏まえつつ、Wang(2014)が提唱した「双層品詞類範疇観(Two-level Lexical Categorization Theory)」²を理論的枠組みとして援用し、品詞兼務の概念を下記のように再定義する。

- (6) ラングの次元において語彙的意味が共通し(あるいは少なくとも緊密な関連性が認められ)、複合字音語基を単語の主幹部としながら、語尾や派生辞を伴って、恒常的に(すなわち臨時的ではなく)複数の品詞として機能する現象(同時的である必要はない)を「品詞兼務」と定義する。このような語については、国語辞書において普通二つ以上の品詞が併記されている。

上記の定義に基づくと、「野外で自然に親しむ」と「英語が自然に出て来る」や「無口だから自然友人も少ない」における「自然」³は、前者と後二者の間に明確な意味的関連性を見出すことが困難であるため、品詞兼務の対象から除外される。また、「臨時的でない」という規定により、村木(2012)が挙げる「丈夫がとりえだ」のような、形容詞の臨時的名詞用法も除外することができる。さらに、「同時でない」とは、パロールの次元、すなわち実際の言語使用において、複数の品詞的機能が同時に発揮されるのではなく、その都度いずれか一方として機能することを意味する。

本稿は、以上の規定に基づき、品詞情報が明示されている『学研国語大辞典』第2版、『大辞林』第3版、『明鏡国語辞典』第2版の3種の国語辞典を以て基本漢語における品詞兼務の実態を調査する。第2節では、関連する先行研究を概観した上で本稿の立場を表明する。第3節では、調査の方法と手順を示し、その結果を整理して提示する。第4節では、英語および中国語との対照を踏まえつつ、調査結果の分析を行う。最後に第5節では、本稿の総括を行い、今後の課題を提示しておきたい。

2. 先行研究の検討と本稿の立場

本節では、語基レベルと単語レベルの二つの観点から整理・検討する。その上で、従来の研究における問題点を指摘し、本稿の立場を明らかにする。

2.1 先行研究の検討

2.1.1 単語レベルの品詞兼務——村木(2004=2012)

² 品詞の二重カテゴリー化を指す。

³ 文例はいずれも『新明解国語辞典』第5版による。

日本語における品詞兼務現象を正面から取り上げ、体系的に論じた研究は、筆者の調査した限り、村木（2004=2012）を除いて他に見当たらない。村木（2012）では、現代日本漢語に関する品詞兼務のタイプが整理・提示されている。本稿では、村木（2012）の該当箇所を頁数に基づいて引用し、その議論の概要と特徴を確認することとする。

(7) 村木（2012：104）における現代日本漢語の品詞兼務のタイプ

- ①名詞・動詞：愛、益、利、害、面、注、題、参加、研究、調査、信用、自慢、安定、一致、活躍、緊張、緊迫、欠乏、謙遜、興奮、固定、混雑、混濁、困惑、孤立、衰弱、充実、熟練、憔悴、徹底、対立、達観、低迷、独立、努力、発達、繁栄、繁茂、普及、憤慨、憤激、卑下、矛盾、老成、隆盛、湾曲……
- ②名詞・形容詞：粹、急、危険、健脚、健康、豪華、幸福、孤独、困難、惨烈、自然、癩、自由、純真、親切、神秘、贅沢、尊敬、退屈、多忙、短期、内密、皮肉、不安、不幸、不備、無駄、名誉、迷惑、面倒
- ③名詞・動詞・形容詞：損、得、楽、苦勞、困難、失礼、退屈、心配、感心、難儀、反対、貧乏、不便、不倫、満足、無理、乱暴
- ④名詞・形容詞・副詞：格別、特別、普通、沢山、大概、大抵、偶然
- ⑤形容詞・副詞：案外、結構、十分、絶対、相当、実際、折角、大概、大変、沢山、当然、特別、突然、普通、余計
- ⑥副詞・名詞：全体、大概、実際、絶対、一生、午後、後日、最初、終日、当時……
- ⑦副詞・動詞：二緒、齷齪、終始、当面、急転直下、交互
- ⑧名詞・感動詞：畜生、万歳、失敬、失礼

(点線・波線は筆者による)

上記(7)に関しては、以下のような問題点が指摘できる。

(i) 語例選定の基準が不明であること。

まず、語例の選定基準が辞書依拠であるのか、あるいはコーパス依拠であるのかが明示されていない。村木（2004=2012）は、現代日本漢語に関する辞書記述の不十分さを指摘していることから、辞書依拠の可能性が低いと推測できる。しかし一方で、実際の使用状況を把握できるコーパスを利用している可能性もあり、さらには内省的判断に基づいた選定の可能性も否定できない。

(ii) 語例の一部に間違った分類が見られること。

上記(7)において点線を付した語例は、いずれもタイプを間違えたものである。例えば、村木は「尊敬」を〈名詞・形容詞〉兼務としたが、筆者の手元にある6種の国語辞書⁴ではすべて〈名詞・動詞〉兼務と注記されており、さらにコーパスにおける用例もすべ

⁴ 利用する辞書は、『学研国語大辞典』第2版、『広辞苑』第6版、『明鏡国語辞典』第2版、『新明解

て名詞用法と動詞用法である。また、村木は「失敬」「失礼」を〈名詞・感動詞〉兼務と分類しているが、辞書およびコーパスの調査結果によれば、〈名詞・動詞・形容詞・感動詞〉兼務に分類する方が言語事実に整合する。さらに、「一緒」および「交互」を〈副詞・動詞〉兼務とした点も問題が残る。「一緒」は「一緒に」で副詞、「(ご)一緒する」で動詞として用いられるほか、「登ってくれる人と一緒がいい。」(BCCWJ)のように名詞としても使用される。一方、「交互」は「交互に」で副詞用法を持つが、動詞用法は辞書・コーパスのいずれにおいても確認できない。

(iii) 同一語が複数のタイプに重複分類されていること。

上記(7)波線で示した語例は、複数のタイプに分類されているものである。具体的には、「退屈」は〈名詞・形容詞〉兼務と〈名詞・動詞・形容詞〉兼務、「失礼」は〈名詞・動詞・形容詞〉兼務と〈名詞・感動詞〉兼務、「沢山」は〈名詞・形容詞・副詞〉兼務と〈形容詞・副詞〉兼務、「大概」は〈名詞・形容詞・副詞〉兼務と〈形容詞・副詞〉兼務と〈副詞・動詞〉兼務など、同一語が複数のタイプに重複して分類されている。このような重複分類は、分類基準の曖昧さに起因するものであり、問題点(i)と密接に関連に関連していると考えられる。

(iv) 品詞兼務のタイプの網羅性が不十分であること。

下記第3節の調査結果から明らかなように、品詞兼務のタイプは、『学研』で29種類、『大辞林』で19種類、『明鏡』で20種類が確認される。これらはいずれも村木の提示した8種類を大きく上回る数であり、村木の分類は網羅性にかけていると言える。

(v) 省略記号の使用に一貫性を欠くこと。

村木の分類においては、タイプごとの語例が列挙されているが、省略記号(「……」)が〈名詞・動詞〉兼務および〈副詞・名詞〉兼務の2種類のみで使用されている。本来、他のタイプにも同様の省略が存在するはずであるが、それが明示されていない。単なる記載漏れの可能性もあるが、いずれにせよ明確な説明がない以上、読者が著者の意図を正確に読み取ることは困難である。

以上の点から、村木(2004=2012)の研究は、品詞兼務現象の先駆的な試みであることに意義を認めつつも、語例選定の基準、分類の妥当性、記述の一貫性などにおいて、今後の再検証と補足的研究が必要であると考えられる。

2.1.2 語基レベルの兼用——斎藤(2014=2016)

村木(2004=2012)の指摘にあるように、品詞分類の対象は単語、すなわち語彙素(lexeme)である。したがって、品詞兼務の考察も本来、単語を分析単位として行われるべきである。しかしながら、斎藤(2014=2016)は、語基、特に複合字音語基の分類において、複数の品詞的分類項目にまたがる用例がしばしば観察される点を指摘している。斎藤は、このような現象を「兼用」と呼称し、以下(8)のように定義している。以下の引用は、斎藤(2016)の記述による。

(8) 齋藤 (2016 : 109) における兼用に関する規定

兼用→一つの語基の中に複数の意味的特徴が共存しているため、その形式が複数の形態論的な枠組みに亘って使われるという現象となって現れること。

齋藤 (2016) において特に注目されるのは、複合字音語基の「兼用」現象に関する (i) 質的下位類の提示と、(ii) 「兼用類」の体系的な位置付けという2点である。前者に関して、齋藤は下記 (9) のように述べ、兼用語基の性質をより精緻に類型化している。

(9) 齋藤 (2016 : 108-109) における複合字音語基の兼用類の質的3分類

①用言類と体言類 (複雑事象名詞になる) の兼用⇒構造的・恒常的な兼用

ex.研究・分析：用言類→ジョンが3年間日本語を研究 (する) ・分析 (する)

…動名詞 (漢語サ変動詞) [語レベル]

体言類→ジョンの (による) 3年間の日本語の研究・分析

…複雑事象名詞 [語レベル]

②相言類と体言類との兼用⇒程度的・局所的な兼用

ex.必要：相言類→必要な事項、とても必要だ…形容動詞⁵ [語レベル]

体言類→必要が生じる、必要を感じる、必要に備える…名詞 [語レベル]

③その他の兼用⇒個別的・偶然的な兼用

ex.特別：相言類→特別な扱い、とても特別だ…形容動詞 [語レベル]

副言類→特別、何とも思わない…副詞 [語レベル]

後者に関して、齋藤 (2016 : 108) は「兼用類が自立形式、拘束形式と同レベルに並べられる」と論じており、その関係を下記図1のように示している。



図1. 齋藤 (2016) における複合字音語基の下位類

複合字音語基兼用類の質的3分類に関する齋藤 (2016) の考え方については、筆者もおおむね賛同する。本稿第3節では、齋藤の提案を実証的に検証する。しかしながら、兼用類の位置づけに関しては、齋藤の見解とは一部異なる立場をとる。まず、自立形式と拘束形式とは、単語を構成する際の語基の形態的性質に基づく分類である。自立形式 (free form) とは、単独で単語を構成し得る形式を指し、拘束形式 (bound form) とは、単独では単語を構成し得ない形式を指す。これに対して、松下 (1978 : 189-190) は、単語を単性詞と複性詞に区分しており、この観点からすれば、語基レベルにおける兼用類と対立し得るのは単一類のみであると考えられる。単一類であれ兼用類であれ、その内部には自立形式と拘束形式の双方が混在している可能性が高い。したがって、兼用類と自立形式・拘束形式とは同一の次元で論じることとはできない。ゆえに、本

⁵ 齋藤 (2016) では、「本書の立場からは「形容詞」となるが、ここは通説にしたがい『形容動詞』としておく」と指摘されている。「形容詞」の規定に関するは、本稿の立場と共通している。

稿では兼用類の位置づけを下記図 2 のように修正し、両者を異なる層位において捉えることを提案する。

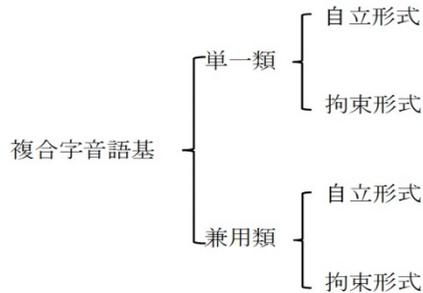


図 2. 修正を加えた複合字音語基の下位類

2.2 本稿の立場

本稿は基本的に単語レベルにおける品詞兼務の問題を検討対象とする。野村(1999)の指摘によれば、使用データとしての基本漢語は、「単語」と呼ぶよりも「語基」と呼ぶ方がより適切である。その理由は、基本漢語 3000 語の中には、「国際」や「民主」のように、独立して語を構成できない「結合専用語基」が一定数含まれているためである。もっとも、筆者はこのような語基はごく少数にとどまり、調査結果の傾向を左右するほどの影響は及ぼさないと判断する。

第一に、単語の品詞兼務を論じる際には、ラング次元とパロール次元を明確に区別する必要があるという点である。品詞兼務は、ラング次元においては語が二つ以上の品詞的特性を潜在的に有することを指すが、パロール次元においては複数の品詞性が同時に発現するわけではなく、どの品詞として機能するかは具体的な統語環境によって決定される。ただし、ラング次元は一方的にパロール次元を規定するのみならず、パロール次元における実際の使用からも影響を受け、変化するものである。すなわち、パロール次元における品詞の臨時的なスライドが固定化すれば、その用法はラング次元においても徐々に定着し、最終的にはレキシコンに登録されることが可能となる。この点については、王仁強(2014)および楊旭・王仁強(2018)の見解と軌を一にする。

第二に、語基分類においては「語の構成法」を基準として一貫して適用するという点である。このように基準を徹底することにより、語基レベルでの兼用現象は、直接的にラング次元レキシコンにおける品詞兼務として反映されるが、パロール次元とは直接的な関連をもたないことになる。したがって、第3節で行うラング次元に基づく辞書調査の結果は、斎藤(2016)の提案を実証的に検証するための根拠となり得る。

2点目は、語基分類が「語の構成法」という基準を徹底させること。そうすることにより、語基の兼用が直接ラング次元レキシコンの品詞兼務に反映するが、パロール次元とは直接関係しないということになる。故に、第3節で行うラング次元の辞書調査は、その結果が直接斎藤(2016)を検証できるわけである。

3. 調査とその結果

本調査の準備段階においては、まず『学研』『大辞林』『明鏡』の3種の国語辞書を用い、基本漢語に品詞情報を付与する作業を行った。この作業を通じて、品詞注記を施した基本漢語 3000語を「基本漢語品詞注記データベース」として構築した。調査辞書として上記3種を採用した理由は、それぞれの辞書において品詞情報が明示されており、可能な限り筆者の主観的判断を排除できると考えたためである。もっとも、辞書間には一定の記述差異が存在することを考慮しなければならないが、本稿では分析上の便宜を優先し、統一的な基準に基づいて処理を行った。以下では、以上の方法により得られた調査結果の詳細について紹介する。

3.1 『学研国語大辞典』第2版による調査

本調査では、基本漢語 3000語のうち、『学研』第2版に未登録の6語⁶を除外し、残る 2,994語を対象とした。分析に際しては、まず品詞兼務語の全体的な位置づけを単一品詞グループと対照し、その分布状況を明らかにする(表1)。さらに、品詞兼務語の内部構成を整理したうえで、二品詞兼務、三品詞兼務、四品詞兼務の各タイプについて詳細に検討する。その集計結果をそれぞれ表2～表5にまとめる。

表1. 品詞兼務の位置付け——単一品詞グループとの対照

品詞兼務の状況	単一類	兼務類				合計
		二品詞 兼務	三品詞 兼務	四品詞 兼務	小計	
語数	1,613	1,339	39	3	1,381	2,994
百分比 (%)	53.87	44.72	1.30	0.10	46.12	99.99

注：合計の百分率が100%に満たないのは、四捨五入による誤差のためである。

表2. 品詞兼務の内部の内訳

割合 \ 類型	二品詞兼務	三品詞兼務	四品詞兼務	合計
語数	1,339	39	3	1,381
百分比 (%)	96.96	2.82	0.22	100

⁶ 『学研』に登録されていないのは「抗生」「公聴」「共和」「刑務」「電器」「徐徐」の6つである。

表 3. 二品詞兼務の内訳

番号	品詞兼務のタイプ	語数	百分比 (%)
1	〈名詞・他動詞〉	586	43.76
2	〈名詞・自動詞〉	394	29.42
3	〈名詞・形容動詞〉	155	11.58
4	〈名詞・自他動詞〉	132	9.86
5	〈名詞・副詞〉	43	3.21
6	〈形容動詞・副詞〉	10	0.75
7	〈名詞・接尾語〉	6	0.45
8	〈名詞・助数詞〉	4	0.30
9	〈名詞・代名詞〉	2	0.15
10	〈名詞・接続助詞的〉	2	0.15
11	〈接頭語・連体詞〉	1	0.07
12	〈名詞・補助動詞〉	1	0.07
13	〈名詞・接頭語〉	1	0.07
14	〈形容動詞・自他動詞〉	1	0.07
15	〈形容動詞・自動詞〉	1	0.07
16	合計	1339	99.98

注：① 〈名詞・副詞〉タイプは、〈名詞・副詞〉および〈名詞・副詞的〉を一括したものである。

② 〈名詞・接尾語〉は、〈名詞・接尾語〉および〈名詞・接尾語的〉を一括したものである。

③ 合計の百分率が 100%に満たないのは、四捨五入による誤差のためである。

表 4. 三品詞兼務の内訳

番号	品詞兼務のタイプ	語数	百分比 (%)
1	〈名詞・形容動詞・自動詞〉	15	38.46
2	〈名詞・形容動詞・副詞〉	9	23.08
3	〈名詞・形容動詞・自他動詞〉	3	7.69
4	〈名詞・他動詞・副詞〉	2	5.13
5	〈名詞・形容動詞・他動詞〉	2	5.13
6	〈名詞・自動詞・副詞〉	2	5.13
7	〈名詞・他動詞・接尾語〉	2	5.13
8	〈名詞・自動詞・代名詞〉	1	2.56
9	〈名詞・接続助詞的・自動詞〉	1	2.56
10	〈名詞・自動詞・感動詞〉	1	2.56
11	〈形容動詞・副詞・自動詞〉	1	2.56
12	合計	39	99.99

注：合計の百分率が 100%に満たないのは、四捨五入による誤差のためである。

表5. 四品詞兼務の内訳

番号	品詞兼務のタイプ	語数	百分比 (%)
1	〈名詞・副助詞的・接続助詞的・接続詞〉	1	33.33
2	〈名詞・形容動詞・自動詞・感動詞〉	1	33.33
3	〈名詞・自動詞・形容動詞・副詞〉	1	33.33
4	合計	3	99.99

注：合計の百分率が100%に満たないのは、四捨五入による誤差のためである。

3.2 『大辞林』第3版による調査

基本漢語3000語のうち、未収録語3語⁷を除いた2,997語を調査対象とした。調査手順および分析方法は、前節3.1と同様である。すなわち、分析に際しては、まず品詞兼務語の全体的な位置づけを単一品詞グループと対照し、その分布状況を明らかにする(図6)。さらに、品詞兼務語の内部構成を整理したうえで、二品詞兼務、三品詞兼務、四品詞兼務、五品詞兼務の各タイプについて詳細に検討する。その集計結果をそれぞれ表7～表11に示す。

表6. 品詞兼務の位置付け——単一品詞グループとの対照

品詞兼務の状況	単一類	兼務類					合計
		二品詞兼務	三品詞兼務	四品詞兼務	五品詞兼務	小計	
語数	1,538	1,396	59	3	1	1,459	2,997
百分比 (%)	51.32	46.58	1.97	0.10	0.03	48.68	100

表7. 品詞兼務の内部の内訳

割合 \ 類型	二品詞兼務	三品詞兼務	四品詞兼務	五品詞兼務	合計
語数	1,396	59	3	1	1,459
百分比 (%)	95.68	4.04	0.21	0.07	100

⁷ 『大辞林』に登録されていないのは「抗生」「公聴」「刑務」の3つである。

表 8. 二品詞兼務の内訳

番号	品詞兼務のタイプ	語数	百分比 (%)
1	〈名詞・スル〉	1,146	82.09
2	〈名詞・形容動詞〉	197	14.11
3	〈名詞・副詞〉	43	3.08
4	〈名詞・接尾語〉	4	0.29
5	〈形容動詞・副詞〉	4	0.29
6	〈名詞・代名詞的〉	1	0.07
7	〈名詞・感動詞〉	1	0.07
8	合計	1,396	100

注：① 〈名詞・副詞〉は、〈名詞・副詞〉および〈名詞・副詞的〉を一括したものである。

② 〈名詞・接尾語〉は、〈名詞・接尾語〉および〈名詞・接尾語的〉を一括したものである。

表 9. 三品詞兼務の内訳

番号	品詞兼務のタイプ	語数	百分比 (%)
1	〈名詞・形容動詞・スル〉	29	49.15
2	〈名詞・形容動詞・副詞〉	19	32.20
3	〈名詞・スル・副詞〉	5	8.47
4	〈名詞・スル・接尾語〉	1	1.69
5	〈名詞・スル・感動詞〉	1	1.69
6	〈名詞・スル・代名詞〉	1	1.69
7	〈名詞・副詞・感動詞〉	1	1.69
8	〈名詞・副詞的・スル〉	1	1.69
9	〈名詞・接続助詞的・接続詞〉	1	1.69
10	合計	59	99.96

注：①合計の百分率が100%に満たないのは、四捨五入による誤差のためである。

② 〈名詞・形容動詞・副詞〉は、〈名詞・形容動詞・副詞〉および〈名詞・形容動詞・副詞的〉を一括したものである。

表 10. 四品詞兼務の内訳

番号	品詞兼務のタイプ	語数	百分比 (%)
1	〈名詞・形容動詞・スル・副詞〉	2	66.67
2	〈名詞・形容動詞・スル・副詞〉	1	33.33
3	合計	3	100

表 11. 五品詞兼務の内訳

番号	品詞兼務のタイプ	語数	百分比 (%)
1	〈名詞・接続助詞的・接続詞的・副詞的〉	1	100
2	合計	1	100

3.3 『明鏡国語辞典』第2版による調査

基本漢語 3000 語のうち、登録されていない 6 語および「造」と表記される造語成分 2 つ⁸を除外し、残された 2,992 語を分析対象とした。調査手順および分析方法は、前節 3.1、3.2 と同様の手法に基づき、品詞兼務の位置付け（単一類との対照から）、品詞兼務内部の構成、二品詞兼務、三品詞兼務、四品詞兼務の各内訳を明らかにし、それぞれ表 12～表 16 に整理する。

表 12. 品詞兼務の位置付け——単一品詞グループとの対照

品詞兼務の状況	単一類	兼務類				合計
		二品詞兼務	三品詞兼務	四品詞兼務	小計	
語数	1,607	1,343	39	3	1,385	2,992
百分比 (%)	53.71	44.87	1.30	0.10	46.27	99.98

注：①合計の百分率が 100%に満たないのは、四捨五入による誤差のためである。

②造語成分が明確に形態素として機能することから、〈名詞・造〉は単一品詞群に分類した。

表 13. 品詞兼務の内部の内訳

割合 \ 類型	二品詞兼務	三品詞兼務	四品詞兼務	合計
語数	1,343	39	3	1,385
百分比 (%)	96.97	2.82	0.22	100.01

注：合計の百分率が 100%を超えるのは、四捨五入による誤差のためである。

⁸ 『明鏡』に登録されていない単位は「抗生」「公聴」「法治」「刑務」「電器」「徐徐」であるのに対して、「造」と表示される造語成分は「一昨」「一大」である。

表 14. 二品詞兼務の内訳

番号	品詞兼務のタイプ	語数	百分比 (%)
1	〈名詞・他サ変〉	598	44.53
2	〈名詞・自サ変〉	358	26.66
3	〈名詞・形容動詞〉	185	13.78
4	〈名詞・自他サ変〉	140	10.42
5	〈名詞・副詞〉	48	3.57
6	〈形容動詞・副詞〉	11	0.82
7	〈名詞・代名詞〉	2	0.15
8	〈形容動詞・接続助詞的〉	1	0.07
9	合計	1,343	100

注：① 〈名詞・副詞〉は、〈名詞・「に」の形で副詞〉、〈名詞・（多くは「に」を付けて副詞的）〉、〈名詞・副詞〉および〈名詞・副詞的〉を一括したものである。

② 〈名詞・代名詞〉は、〈名詞・代名詞〉および〈名詞・代名詞的〉を一括したものである。

表 15. 三品詞兼務の内訳

番号	品詞兼務のタイプ	語数	百分比 (%)
1	〈名詞・形容動詞・自サ変〉	16	41.03
2	〈名詞・形容動詞・副詞〉	11	28.21
3	〈名詞・形容動詞・他サ変〉	3	7.69
4	〈名詞・自サ変・副詞〉	3	7.69
5	〈名詞・他サ変・副詞〉	1	2.56
6	〈名詞・接続助詞的・接続詞〉	1	2.56
7	〈名詞・形容動詞・自他サ変〉	1	2.56
8	〈名詞・自サ変・代名詞〉	1	2.56
9	〈名詞・接続助詞的・自サ変〉	3	2.56
10	〈名詞・自サ変・感動詞〉	1	2.56
11	合計	39	99.98

注：合計の百分率が100%に満たないのは、四捨五入による誤差のためである。

表 16. 四品詞兼務の内訳

番号	品詞兼務のタイプ	語数	百分比 (%)
1	〈名詞・形容動詞・自サ変・感動詞〉	2	66.67
2	〈名詞・自サ変・形容動詞・副詞〉	1	33.33
3	合計	3	100

4. 調査分析

第3節では、基本漢語における品詞兼務の実態について、3種の国語辞書を対象に調査を行った。本節では、その結果をもとに、国語辞書間の比較および英語・中国語との対照を視野に入れつつ、前節の調査結果を分析することを目的とする。

4.1 国語辞書間の比較から得られた知見

本稿の立場によれば、斎藤(2016)が提示した「複合字音語基兼用類」に関する質的3分類は、語のラング次元における品詞兼務の在り方に直接反映されると考えられる。そこで、斎藤(2016)の結論を検証するために、本節では、〈名詞・動詞〉および〈名詞・形容動詞〉の2類型を中心に、国語辞書間の比較を行い、その結果を表17に示した。

なお、『大辞林』は動詞の自他を区別しないため、『学研』および『明鏡』における〈名詞・自サ変〉〈名詞・他サ変〉〈名詞・自他サ変〉を一括して処理し、『大辞林』のデータと対照した。詳細は、下記表17の通りである。

表17. 品詞兼務をめぐる国語辞書間の比較

統計項目		辞書別	『明鏡』	『学研』	『大辞林』
単一類／兼務類	語数		1,607/1,385	1,613/1,381	1,538/1,459
	百分比 (%)		53.71/46.29	53.87/46.13	51.32/48.68
二品詞兼務 ／兼務全体	語数		1,343/1,385	1,339/1,381	1,396/1,459
	百分比 (%)		96.97/100.01	96.96/100	95.68/100
〈名詞・動詞〉 ／兼務全体	語数		1,096/1,385	1,112/1,380	1,146/1,459
	百分比 (%)		79.13/100	80.58/100	78.55/100
〈名詞・形容動 詞〉／兼務全体	語数		185/1,385	155/1,380	197/1,459
	百分比 (%)		13.36/100	11.23/100	13.50/100
〈名詞・動詞〉 〈名詞・形容動 詞〉／兼務全体	語数		1,281/1,385	1,267/1,380	1,343/1,459
	百分比 (%)		92.49/100	91.81/100	92.05/100

上記の表17を見て分かるように、〈名詞・動詞〉兼務が兼務全体の約8割を占め、〈名詞・形容動詞〉兼務が兼務全体の1割強を占めている。一方で、その他の複数の兼務タイプは兼務全体の1割にも満たない割合にとどまっている。本稿の辞書調査は、ラング次元における品詞兼務のあり方を問題とするものであり、これらの結果は、基本的に上記(9)で示した斎藤(2014=2016)による複合字音語基兼用類の質的3分類⁹の結論を実証的に裏付けるものと言える。

4.2 英語・中国語との比較を兼ねた分析

王仁強(2014)によれば、分析的言語(analytic language)においては、品詞兼務がしばしば観察される現象である。現代英語および現代中国語はいずれも分析的性格を有しており、そのた

⁹ 斎藤(2014=2016)は内省による研究である。

め品詞兼務は両言語の品詞論の研究において重要な位置を占めている。中国語や英語といった分析的言語における品詞兼務の用例は、語形変化を伴わず、同一の語形が異なる文法的機能を担う点に特徴がある。具体的な用例は、次の例(12)、例(13)¹⁰を参照されたい。

- (12) a. 在《神圣家族》(1844)中, 马克思在评论黑格尔哲学时写道: “在黑格尔的体系中有三个因素”: 斯宾诺莎的实体, 费希特的自我意识以及前两个因素在黑格尔那里的必然的矛盾的统一, 即绝对精神。 (《当代》)
- b. 众多网民的评论中, 不乏忧国忧民、建言献策的留言。 (《当代》)
- (13) a. For several months I wooed an attractive young lady. (《The Wall Street Journal》)
- b. Sullivan also has attacked cigarette makers for targeting advertising on minorities, women and the young. (《The Wall Street Journal》)

これに対して、総合的言語(synthetic language)の性格を持つ日本語においては、品詞兼務は従来の品詞論研究においてほとんど問題とされてこなかった。しかし、第3節の調査結果から明らかになったように、日本語における借用語としての日本漢語は、日本語体系に完全には同化していないため、分析的言語に特徴的な現象の品詞兼務一定程度観察される。もっとも、日本漢語は総合的言語である日本語の文脈において使用されるため、語尾や派生辞の付加を免れないという点において独自の性格を示す。以下では、英語および中国語との比較を通じて、基本漢語に見られる品詞兼務の様相をより詳細に検討する。

(一) 基本漢語における単一類と兼務類がほぼ半々を占めていること。

王仁強(2014)および楊旭・王仁強(2018)によれば、『Oxford Advanced Learner’s English Dictionary』7th ed.に基づく兼務類は全体の10.48%を占める一方、『現代漢語詞典』第6版では兼務類は全体のわずか6.65%にとどまる。したがって、分析的言語としての英語・中国語における兼務類の比率は、直観的に想定されるほど高くはないと言える。ところが、使用頻度と使用領域に基づき British National Corpus と Oxford Corpus Collection を用いて抽出された基本3000語(以下「Oxford 3000TM」)では、兼務語数が1,435語に達し、全体の48.24%を占める。Oxford 3000TMは性質および量的分布の点で基本漢語に近く、本格的な比較の対象として妥当であると考えられる。実際、『学研』『大辞林』『明鏡』における兼務類の割合はそれぞれ46.12%、48.68%、46.27%であり、Oxford 3000TM(48.24%)とほぼ一致している。これらの結果は、使用頻度が高い語ほど兼務を示す割合が上昇する傾向を示唆している。

(二) 二品詞兼務が支配的であること。

『学研』『大辞林』『明鏡』における二品詞兼務は、それぞれ品詞兼務全体の96.96%、95.68%、96.97%を占めており、三品詞以上の兼務を合算しても5%未満にとどまる。これに対してOxford 3000TMでは、二品詞兼務が品詞兼務全体の81.33%を占めるにとどまる。基本漢語と基本英語語彙の二品詞兼務比率の差異は、基本漢語側は最大で四品詞兼務まで観察されるのに対し(『大辞林』では例外的に五品詞兼務が1語見られるのみ)、Oxford 3000TMでは六品詞兼務の類型も存在し、かつ三品詞兼務が比較的高い比率(14.74%)を示すことに起因するものと考えられる。

(三) 主要な兼務タイプが〈名詞・動詞〉および〈名詞・形容動詞〉であること。

『学研』『大辞林』『明鏡』における〈名詞・動詞〉兼務タイプの割合はそれぞれ78.55%、80.58%、

¹⁰ 例(12)と例(13)はBCCコーパス(<https://bcc.blcu.edu.cn>)による。

79.13% であり、〈名詞・形容動詞〉兼務はそれぞれ 11.23%、13.50%、13.36% を占める。これに対し王仁強 (2014) は、OALD-7 のデータを用いて、二品詞兼務類型全体における〈名詞・動詞〉および〈名詞・形容動詞〉の占有率をそれぞれ 59.65%と 28.12%と報告している。以上より、基本漢語は特に〈名詞・動詞〉兼務に集中している傾向が明確である。

以上の(一)～(三)の分析から、基本漢語、英語 (Oxford 3000TM を含む)、中国語 (コーパス/辞書データ) はいずれも方向性の一致した調査結果を示していることが確認された。特に、使用頻度の高い基本語群において兼務率が高まる点や、二品詞兼務が大多数を占める点、および〈名詞・動詞〉の兼務が支配的である点は共通の特徴として挙げられる。したがって、基本漢語における品詞兼務の研究は、語彙・語法研究のみならず、一般言語学的観点からも重要な意義を有しており、今後さらに慎重かつ体系的な検討が求められる。

5. おわりに

本稿は、日本語品詞論においてこれまで十分に注目されてこなかった「品詞兼務」の問題を取り上げ、複数の国語辞書を対象に実証的な調査を行ったものである。具体的な成果についてはここで繰り返さないが、第3節および第4節で示した分析結果を参照されたい。

もっとも、国語辞書における漢語の記述には、自由語基と拘束語基の同一視や、いわゆる「名詞注記主義」(名詞でない語にも一律に名詞を注記する傾向)といった複数の問題点が指摘される。そのため、辞書情報を前提とする場合には、品詞注記の妥当性をコーパス資料に基づいて検証する必要があると考えられる。さらに、兼務タイプごとの詳細な分析、すなわち特定の兼務語においてどの品詞が優勢に機能しているかを明らかにするためのパロール次元における研究が今後の課題として期待される。例えば〈A・B〉の品詞兼務が見られる場合、実際の使用においては、①品詞Aが優勢となる場合、②品詞Bが優勢となる場合、③両品詞が拮抗する場合、の3つの可能性が想定される。このような分析は、品詞分類の理論的精緻化に資するだけでなく、日本語教育や第二言語教育の実践にも有用な知見を提供するものである。

以上の2点を、今後の研究課題として提示しておきたい。

参考文献

- 斎藤倫明 (2014) 「複合字音語基の『兼用』について」『文化』77-3・4。
 斎藤倫明 (2016) 「複合字音語基『兼用』類」『語構成の文法的側面についての研究』, ひつじ書房。
 松下大三郎 (1978) 『改選標準日本文法』改訂版 勉誠社。
 村木新次郎 (2004) 「漢語の品詞性を再考する」『同志社女子大学日本語日本文学』16。
 村木新次郎 (2012) 「漢語の品詞性を問う」『日本語の品詞体系とその周辺』, ひつじ書房
 王仁強 (2014) 《現代英語兼类現状研究——以〈牛津高阶英语词典〉(第7版)为例》《外国语》4。
 杨旭、王仁強 (2018) 《〈现代汉语词典〉(第6版)兼类词表征策略》《广东外语外贸大学学报》4。
 Wang, R. Q. (2014) Two-Level Word Class Categorization in Analytic Languages, *Proceedings of the 36th Annual Conference of the German Linguistic Society, Germany: University of Marburg.*

調査用辞書

- 金田一春彦・池田弥三郎編 (1988) 『学研国語大辞典』第2版, 学研プラス。
 松村 明編 (2006) 『大辞林』第3版, 三省堂。
 北原保雄編 (2010) 『明鏡国語辞典』第2版, 大週刊書店。